
標本箱

はんどろん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

標本箱

【EZコード】

N5472N

【作者名】

はんざろん

【あらすじ】

一人の老人の死と、その老人を見送った人々のそれぞれ。
(頁四で完結)

死んだおじいちゃんがくれたのは、標本箱だった。標本箱と言つても、虫ピンに刺された蝶やらの昆虫の姿はない。からっぽだ。わたしが昔おじいちゃんに見せてもらつたこの標本箱には、確かに色とりどりの蝶の屍骸が突き刺さっていたのに。おじいちゃんは何故かその蝶を全部出してしまつた上で、この標本箱をわたしに遺したのだ。

わたしに遺してくれたのはたつたこれだけ。

「懐かしいなあ」

まだ黒いスースを着たままのお父さんが感慨深げにそう言いながら、わたしが腰掛けている縁側によつこらせ、と座つた。お父さんに遺されたものは、蓋が透かし彫りになつていて銀色の懐中時計と古びた銅製のコーヒーミルと、猫の額ほどの土地。その土地はおじいちゃんよりもっと前にいなくなつてしまつたおばあちゃんが、細々と畑をしていた土地だつたけれど、おばあちゃんの死後は草ぼーぼーの昆虫達の楽園みたいになつてた。わたしは今よりも小さい頃におじいちゃんとその土地で昆虫を探つたことがある。

わたしは両手に持つた、平べつたい大きめの標本箱をなんとなく覗き込んだ。古びた木縁に薄い硝子の向こうは真つ白だ。昆虫達がはり付いていた跡なんて全然ない。

「中に入つていた蝶々は？」

知らない、と私は首を横に振る。お父さんは不思議そうに首を傾げる。

お父さんも見たんだ。この標本箱に色んな蝶々がいたのを。

ああいろいろみどりいろむらさきころくろいろ。

「もしかしたら親父の道案内に行つてしまつたのかもなあ」

みちあんない。

首を傾げると、お父さんは縁側から見える、前に来た時よりも草

が増えた庭を見たまま、微笑んで頷いた。調度その時、がらり後ろの硝子戸が開いてお母さんが顔をひょっこり出してお父さんを見つけた。

あら、こんな所にいたの。色々話しあつみたいだから、あなたも来てちょうだい。

お母さんがそう言つと、お父さんは膝に片手をついて立ち上がる。わたしは座つたままその様子をじっと眺めた。お父さんは一度振り返つてにつこり笑うと、庭の方を指差して直ぐに行ってしまった。お父さんが指差した方には、ちょうど蝶々がひらひらと雑草の上を落ち葉みたいに飛んでいた。黒っぽい蝶々だ。

時々葉っぱや花に止まつては、直ぐに何かから逃げるように飛び立つてはひらひらしている。

捕まえてみようか。

からっぽの標本箱は、なんだか寂しい。

わたしは立ち上がりと標本箱を縁側に置いてゆっくりと蝶々の方へ近づいた。

ひらひら、ひらひら。

優雅に飛んでいるだけに見えて、意外とすばしっこい。わたしはムキになつて葉っぱに止まつた時、だけじゃなく、飛び回る蝶も蚊を叩くときみたいに手のひらをぱんぱんいわせながら追いかけました。

ぱんっ！

逃げ回っていた蝶が目の前にやつて來た時、わたしはびっくりして思わず反射的に両手で蝶を挟んだ。手を開くと、翅を覆う鱗粉が手のひらに薄つすらと広がつていった。すべすべとした不思議な感触が気持ちよくて、足を僅かに動かす蝶の翅を指先とそつと擦ると今度は指先に鱗粉が付く。

「うわあ、殺しちゃったのかあ」

後ろから聞こえた直接的な言葉にわたしはぎょっとして振り返つた。

「けど、そんにしたらもう標本にはできないね」

そつか。手の中で惨めな姿になつてしまつた蝶々は、標本にするには少し不恰好だ。体は潰れて少し体液が出ているし、鱗粉の取れてしまつた翅の模様は微妙に変わつてしまつてゐる。それでも足だけはまだもがくようになつてゐる。

ちよつとぞつとして、手のひらが「んやくなつた。

「ほり、これ」

そう言つて差し出された、三角に折られた薄い紙の束を不思議そうに眺めていると、差し出したお兄ちゃんは苦笑いした。

「本当は虫とり網で捕まえた蝶を、この紙で包んで持つて帰つて、それから標本箱に刺すんだ。じいさんの部屋にあつたから、君に渡すようにつて」

わたしはようやくその紙の束を受け取ると、お兄ちゃんは少しほつとしたようだつた。

そういうえば、おじいちゃんがこの紙に挟まれた蝶々の屍骸を。ピンセツトでとつて、翅を広げているのを見たことがあつた。

「まあ、その蝶は捨てるといいよ。この庭は蝶道になつてゐるみたいだから……ほり、まだ飛んでるし虫取り網とつて来ようか？　じいさんの部屋にあつたけど

いい。わたしは横に首を振るともう一度手の中の蝶々を見た。さつきまで動いていた足ももう動いていない。殺しちやつた。

学校の先生が言つていたことを思い出す。

小さな昆虫にも、花にも、みんな人間と同じ。いのちはあるんですよ。

おじいちゃんにも命があつた。だつたらこの蝶々にも。でも、目の前で死んだにも関わらず、蝶々が死んでもちつとも悲しくなんかならない。先生の言葉を思い出して少しだけ可哀想なことをしたかな、と言葉で思つただけで本当は心なんてこれっぽっちも動いていない。ちよつと不快には感じたけれど。

おじいちゃんの時には、少し泣いた。前に道端で車に轢かれて死

んでいた犬を見た時も、可哀想だと思った。どうしてだろ？

「多分、人間には小さい生き物の命を感じ取る力が少ないんだよ。生きてるって頭で分かっていても、本当のところ、それを感じ取ることは難しい」

喋らないからかな。そういうえば、飼っている猫が死んで泣いている子は見たことがあるけれど、飼っている昆虫が死んで泣いている子をあんまり見たことがない。

「どうだろ？　けど、翅音とかだけじゃいまいちぴんとこないよな」

「綺麗だからじゃないかな。あと、好きだから。置いておきたくな

る。それに思い出があつたらもつと置いておきたくなる。その内その意味も忘れるのに……いや、物みたら思い出すのかな」

物と一緒にだね。わたしも、ソーダーの瓶に入つてたビー玉を集め

てた。

「うん。屍骸は物と一緒にかも。ほんの一瞬前まで生きていても、生きていた時は明らかに違うし。それにしがみ付こうとするのは生きてる人間だけだよね」

そう言つたお兄ちゃんはちらりと硝子戸の方を見たあと、私を見た。今頃お父さんやお兄ちゃんの両親は、戸の向こうで何か話し合つてるんだろう。おばあちゃんの煙跡は、どうしようもないでので売つてしまつららしい。もう誰も住むことの無くなつてしまつこの家も、売り払うんだろうか。

「じいさん、あとから燃やしに行くらしよ」

そりなんだ。おじいちゃんはあとちょっとで骨だけになつちゃうらしい。それはちょっと寂しいかも。今まで生きていた時のおじいちゃんの顔を思い出すのは難しいのに、燃やしちゃつたら写真を見て思い出すしかない。

おじいちゃんを標本にできないの。

私が言つとお兄ちゃんは微妙な笑い方をして、無理なんじやないの、と言つた。

標本にすれば、いつでも会えるのにね。

「会えるんじやなくて、見れるんだよ。死んだ人には、もつ会えない

い」

そつか。もう、会えないのか。

「……母さんが呼んでる。行くよ。その蝶、どうするの」

標本にする。

「汚くない？」

汚いのかな。

「だつて、人間だつたらそれ内臓とか出てる状態なんじやない」

そうなのかなあ。そう思つとちょっと気持ち悪いかも。

「捨てなよ。同じ風なのいっぱい飛んでるだろ」

うん。そうだね。

わたしは蝶の翅を指先で掴むと、手のひらにくっついた体を引き剥がして地面に落とした。ひらひらと飛んでいた時よりも速くに蝶の屍骸は地面に落ちた。手のひらについた鱗粉を払おうと両手のひらを擦り合わせたけれど、全然おちるどころか手のひら中に広がってしまう。

「手を洗うと綺麗にとれるよ」

うん、と頷いてわたしは標本箱を掴んで抱きしめた。からっぽの標本箱はやけに軽いような気がする。

お兄ちゃんの言つた通り、やつぱり中に入れられるなら、どうせなら綺麗な生きてるみたいな蝶々の方がいい。

おじいちゃんも蝶々が入つたままでくれたらよかつたのに。

「蝶々？ 元々入つてたの、その箱に？ 元からからっぽじやなかつたつけ」

ううん。入つてた。色んな色の、ぴんつと翅を張った蝶々たちが。

「ふうん？ どこに行つたんだろうね。まあ、いいや。行こう」

わたしは手が鱗粉に塗れていたことも忘れて、差し出されたお兄ちゃんの手を握った。お兄ちゃんもさつきのことに忘れてるみたいで、大きな手でわたしの手を包み込む。

すべすべした感触にお互い気付かない。

跡形も、なくなる。

わたしたちの記憶の中からも。

綺麗な標本箱に、わたしは何を残そう。忘れたくないものは、きっとこの小さな標本箱には入りきらない。それに、それはきっとそのままの内ただのものになる。

やつぱり、蝶々かな。他の虫はちょっと苦手だし。意味はないけれど、せっかく箱があるんだからやってみるのもきっと楽しい。

「屍骸を並べて楽しむなんて、人間って悪趣味だよね」

屍骸は、物と一緒になんでしょう。

「うん。生きてる時の姿を知らなければ。だって、僕にとってじいさんの死体は物みたいなものだもの」

おじいちゃんは、おじいちゃんだよ。

「うん。君にとつてはね。見て、いつぱい飛んでる。みんな越冬した蝶たちだ」

お兄ちゃんの視線を追つて振り向くと、庭はせつせよつたくさん

の蝶々が飛んでいた。

あおいろきいろみどりいろむらさきこんくわこわ。

全部捕まると、多分標本箱が綺麗に埋まる。

「捕まえる？」

いいや。今は。暖かい内だつたら、いつでも採れるもの。

お兄ちゃんはそつか、と軽くと微笑んでわたしの手を引いた。

親父が俺に遺してくれた物は、銀製の懐中時計と、銅製のコーヒーミルと、狭い土地だった。

土地はどうしようもないし、ちょうどいいことにその土地の所らへんに道を作るという話しがあったので、売ることになった。どうせお袋が死んだ時からぼつたらしになっていた場所だ。

「あら、これ何かしら」

妻が不思議そうに言いながら平べったい木の箱の鞄を差し出してきた。

親父の部屋には生きていくには、不需要そうな物がたくさんある。大きな水槽や大きな地球儀、色とりどりのびいど玉を詰め込んだ瓶に、中身が入っていない海外の缶詰の缶。その他にも不思議な物や、剥製やら石やらが所狭しと置かれている。

窓硝子には、先月位に俺が見舞いに持ってきた虹製造機が、外から差し込む光で部屋の中に入人工的な虹をつくり出していた。何か欲しい物があるか、と聞くと親父は虹製造機、と言ったのだ。だから、虹製造機。ネットで調べてそれが何かようやく知つて、通販で買つた。親父はどうしてこんな物知つてたんだろう。というよりも、こんな物を欲しがるなんてまるで子供のようだと少し呆れた。この部屋も、子供部屋のようだ。小学生の時分は、自分の部屋があるのでこの部屋が羨ましくて殆どこの部屋に入り浸つっていたものだ。

「これはね、標本を作るセットだよ。ほら、虫ピンとか入つてる。

昔親父、これ肩に下げて虫捕り網持つてよく蝶とか捕まえに行つたなあ……あれ？ 三角紙は入つてない

「まあ、変わってるわねえ」

妻が変わつてゐる、と言つたのは勿論親父のことではなく、この標本セットのことだ。親父が変わつていたことなんて、妻はとつくるに承知している。それでも妻と親父は仲が良かつた。妻も少し変

わっているのだ。俺がガラクタみたいだと思つような物に興味を示し集める、所謂、蒐集癖みたいなものがある。それの方向性も親父と似通つていた為か、話も合つたのだろう。まだ新婚の頃に親父と妻が、大きな麦わら帽子を被つて一人して虫捕り網を持って出かけた時には、流石の俺も驚いた。

なのにその妻がこの標本セットのことを知らないのは少し意外だつた。虫を捕まえていても、標本にせずにあの大きな水槽で飼つていたのだろうか。けれど、その小さなジャングルのような水槽の中には虫一匹見当たらない。

「虫の命は短いんですよ。お義父さんが寝込まれてから、少しづつこの水槽の中にいた虫も死んでいったの。少し可哀想なことしたかしら」

妻は俺の視線を追づくように水槽に目を向けた。何かを思い出しているのだろうか。じつと水槽を見たまま薄く微笑んでいる。

妻は親父が寝込んでから、身の回りの世話をしてくれたり、広い家の掃除をしてくれたりしていた。

「昔は、捕まえてきては標本にするのに夢中になつてたんだけどなあ」

「それは、あなたが小さい頃?」

「ああ」「まあ」

可笑しそうに妻はくすくすと笑う。

「どうして笑う?」

「だつてそれ、きっとお養父さんは、その標本をあなたに自慢したかつたんだわ」

え、と思い少し目を丸くしてしまつたが、そうだったのか、とも妙に納得できる。

小さい頃俺が感嘆の声を上げたり、興味深々でその様子を眺めていると、親父は嬉しそうに微笑んでいた。その内に俺が興味を示なくなると、それから親父も多分、展翅するのを止めていたのだと

思つ。今度は水槽に小さなジャングルを作つていた。

「あれ…… そういえば」

「なあに?」

「結構な量を作つてたんだと思つけどなあ。標本がない」

「あら、誰かにあげちゃつたんじゃないかしら。ほら、近所に小学校に上がつたばかりの男の子が住んでるじゃない」

「晃君?」

「そういう。あと、一つだけ標本箱があつたんだけど、あなたが来る前に男の子が持つて行つちゃつたわ」

「勇作のところの子か?」

「さあ? ちゃんと顔を見てないからなんとも……」

「そつか

妻は滅多に会わない親戚の子達をまだちゃんと覚えていない。後ろ姿だけで誰がなんて分からぬいだろ?。

「ちょっと風にあたつてくるよ」

物が多いこの部屋は、埃っぽい感じがする。

妻は頷くとまた机の上を掃除し始めた。それを尻目に部屋を出る。親父が集めたものは、流石の妻でも手に余るような物が多いみたいで、恐らく殆どが捨てる事になるだろう。少し経つたら兄貴の家族がこの家に住むことになるが、兄貴は親父の趣味なんかには全く興味がなかつたし、その妻は綺麗好きな上虫が大嫌いだから、例え水槽に虫が入つてなくても見たら悲鳴をあげるかもしない。それに確かにこの部屋は、兄貴の息子が気に入つて、使いたいと言つていた。妻はその時少し寂しそうに、だつたら綺麗に片付けなきゃね、と笑つた。

縁側を歩いていると、小さな少女が座つていた。娘だ。

黒いワンピースから黒いタイツを履いた細い足を外にたらして、じっと手元を見ている。

何かを持っているようだ。俺は娘の手の中にある物を見て、おやと思い思わず首を傾げた。親父の標本箱だ。その箱のことによく覚

えている。親父が始めて展翅した蝶が入つてあつた、娘が持つと大きく見えるB4サイズくらいの古びた木縁のドイツ箱。けれど、その中には蝶の姿はなく、からつぽだつた。一つだけあつたと言つていたし、妻が言つていた標本箱とは、これのことだろうか。男の子が持つて行つてしまつたのではなかつたのだろうか。

「懐かしいなあ」

言いながら娘の隣に腰を下ろした。娘は標本箱から俺へと視線を移した。大きな、黒目がちの愛らしい目でじつと俺のことを見る。我が娘ながら少し不思議な子で、何を考えているのか殆ど分からぬ。自分の子なのに、表情の余りない顔で、真っ黒な瞳でじつと見られると緊張してしまつう時がある。娘との意思疎通は妻の方が上手だつた。流石へその緒で繋がつていただけある、と時々感心させられてしまう。

妻は娘相手にいつもぽんぽんと話題を出して喋つてゐたが、俺には娘相手にどんなことを話せばいいのか分からなくて、いつも話題を搾り出す。

「中に入つていた蝶々は？」

娘は一瞬きょとん、とした後、ゆつくりと首を振つた。

もしかしたら、標本箱を持つて行つた子が、中身を全部出してしまつたのかもしれない。最後に見たのは確か結婚前か結婚した後だつたが、色んな色の蝶が展翅されていた。

青色、黄色、緑色、紫色、黒色……。

そういうえば、昔親父言つてたつけ。蝶々はお迎えだつて。小学校の頃に聞いたその一言を今でも覚えてるつてことは、その時の俺はその言葉を本気で信じていたのかもしれない。

お迎えだつたら、虫ピンで挿しとくなんてまずいんじやないの。

「もしかしたら親父の道案内に行つてしまつたのかもなあ」

娘は首を傾げる。変なことを言つてしまつたかもしない。けど、確かに親父が俺にそれを言つた時、俺は今の娘くらいの歳だつた。変な感じがして、思わず微笑んでしまう。

「あら、こんな所にいたの。色々話しあつみたいだから、あなたも来てちょうだい」

がらつと開いた後ろの硝子戸から、妻が顔をひょっこり出して言った。

立ち上がる時、娘にじっと見られているのに気付いて、庭の方へと手を向けると指指した。

この庭は、蝶々たちの通り道になつているんだよ。

これも、前に親父が言つていた言葉だ。

自分が思つっていたよりも、俺は親父の遊びが好きだったのだろうか。

蝶々の標本、鉱石の標本、世界で始めて作られたポラロイドカラーラ、アヒルの子供の剥製、ドームガラスの内に作られた小さな箱庭に、大きな薬瓶に、絵の具のパレットに、虹製造機。

親父が、自分の小さな世界である部屋で、蝶の通る庭で、楽しそうに笑つている姿を今でもはつきりと思い出せる。

病床で過ごした人生の終わりに、夢の中でも子供のよつて無邪氣に遊んでいたのかもしれない。

お養父さんが亡くなつた。

子供のようによく笑う人で、その笑顔は可愛らしかつた。

穏やかな喋り方や物腰が私は好きだつたし、私達はどこか似通つたところがあつたと思う。

周囲には私たちは子供のようにふわふわと夢見がちに見えていたかもしけないけれど、子供は意外と大人の期待を裏切つて現実主義者だ。自分たちだって子供時代があつたにもかかわらず、そのことを忘れてしまつている。

お養父さんは私に鉱石の標本の入つた木箱を遺してくれた。

私が以前じつくりと見ていたのを覚えていたのだろう。病床であげるよ、と言われた。

小さい頃から私は理科室や図鑑やらが好きだつた。どうして、と聞かれても答えに詰まつてしまつけれど、自然と心が惹かれてしまう。

夫と出合つて、その結果お養父さんとも出合つて、私は夫と出会つた時よりも喜びを感じた。

この人とは、根本的なところが同じものでできている、となんどなく思つた。それは蒐集癖とか、好きなものが似ているというだけじゃなくて、会話している内に感じるものだつた。

「お姉さん、それは誰の標本箱？」

後ろで聞こえた声にはつとして、振り返つて見た。小学校高学年位の男の子だ。積み重ねられた荷物で顔は見えないけれど、まだ声変わりのしていない澄んだ声をしている。

多分、親戚の子供だ。

「これは、おじいちゃんの物よ」

「ふうん。からっぽだね」

少し楽しそうに男の子が言ったので、私は訝しく思いながらも無意識で手に持っていた標本箱を覗き込んだ。

からっぽ。

首を傾げる。前に見た時は確かに色々な色の蝶が入っていたと思うのだけど。

「前はたくさんの蝶が入っていたのよ」

「けど、からっぽだ。その蝶たちはどこに行っちゃったんだろうね」
変なことを気にする子供だわ、と思つたけれど、子供の気にすることなんて結構変なことだつたりするものかもしれない。

その子供の顔を見ようと思つたけれど、ぺたりと座り込んだ状態の足を動かすのが億劫で、結局その子供の方に視線を寄せるだけに止めた。

少し色の白い子供だ。

なんとなくお養父さんが子供の頃、体が弱くて余り外で遊びまわれなかつたと言つていたことを思い出す。もしかすると男の子もうなのかもしない。夫は健康な体で生まれたけれど、夫の弟も体が弱かつたらしい。一族にはよく体の弱い子供が産まれると聞いたことがある。娘もそうだった。

「お姉さんは、じいさんが好きだった？」

唐突な質問に、私は思わず苦笑した。

「大好きだったわよ。すごく、いい人だったでしょう？　それに、趣味が合つたの」

「へえ、じゃあお姉さんも、子供みたいな遊びが好きだったんだね」
本当の子供に言われると、可笑しくなつて笑つてしまつ。

子供みたいな遊び。確かにそうなのだろう。大人になつて虫を嫌いになるなんてことはちつともなかつた。自然の中でできた鉱石に、心惹かれた。不思議な実験道具に、興味が湧いた。

「ええ、大好きよ。おじいさんがいなくなつても、きっと嫌いになんかなつたりしないわ」

「そう？　それはよかつた」

妙に大人びた口調で喋る子供だ。声変わりもしていないような少女に近い声も、そのせいか落ち着いて聞えた。私もこの年頃の時、こんなものだつただろうかと考えてみたけれど、自分のことはなかなか思い出せないものだ。

白い足の男の子は、妙に軽やかな足取りで数歩近づいてくると、両手を掲げた。ちょうど逆光で顔は見えにくいけれど、愛らしい少女の様な顔をした子だ。血の繋がりか、笑顔はあの人を彷彿とさせた。

「その標本箱、僕にくれない？」

「え、ええ……」

吸い寄せられるように見つめていた子供の顔からなんとか目を離して、標本箱を見た。硝子に傷もなく綺麗だけれど、木は古びている。もしこの子供が夫の弟夫婦の子だとしたら、迷惑がられないかと躊躇した。義弟の奥さんは、あんまり会ったことはないけれど少し潔癖なところがあつたのを覚えている。

「あげたい子がいるんだ」

私の思考を呼んだかのようにその子は言った。

誰にも貰われなければ、どうせ捨てられるのだ。お義父さんの思い出を全部とつておくのは流石に難しい。それなら、誰かがどこかで使ってくれるほうが嬉しい。

標本箱を手渡すと、その子は嬉しそうにはにかんだ。そんな顔をすると、ますますお義父さんに似ている。

「ありがとう」

一言そう言つと、その子供は身を翻してあつと言つ間に走り去つてしまつた。

そのまま部屋に入ってきた夫は、部屋を感慨深げに見渡したあと、荷物に塗れて床に座り込んでいた私を見つけて一瞬驚いた顔をした。

「どうしたんだ？ 放心して。疲れたのか？」

私は苦笑して首を振つた。たしかに少しの疲れはあるけれど、放

心するほどではない。ただ、なんとなく不思議な気持ちだった。はつきりと子供の顔は見えなかつたのに、逆光で影になつてぼんやりと見えた表情が妙に印象的だつた。

夫はそうか、と呟くと自分も床に座り胡坐をかいた。高く積まれた物たちをきょろきょろと見上げ、苦笑する。

「ほんとうに、ガラクタばかりだな」

そう言いながら自分のすぐ横の山の上にある小さな四角い缶を手に取る。緑色のその缶は所々錆びているけれど、白い花が描かれていて、黒い文字で英文が書かれているのが分かる。蓋を開けると、中にはシャンデリアのパーツがたくさん入つていて、急に入つてきた光りをきらきらと反射した。

部屋の硝子窓には、夫が少し前に持つて来た虹製造機が外の光りを受けて、部屋の中に華奢な虹をいくつも作つてゐる。部屋自体は古い木造校舎の理科室みたいな雰囲気で、古びた木枠の大きな硝子窓が、すらりと並んでいて庭の様子がよく見えた。窓から差し込む明かりは同時に、部屋の中にたくさんある物のすぐ隣りに大きな影を作る。

私はふいに、お義父さんがひょっこり顔を出しそうな気がして、部屋中にある山の間に目をやつた。

やあ、冗談だよ。ちょっとした冗談さ。まだまだ遊び足りないからね。そう簡単にくたばれないよ。

「親父はほんとうに、変わつた物が好きだつたんだなあ。自分の世界を持つてる人だつた……俺にはやっぱりちょっとわからなによ」

夫はシャンデリアのパーツの一つを摘むと、窓から差し込む光りに透かしながら言つた。

「そうでしょうねえ。あなたとお義父さんじゃあ、百八十度くらい性格も好みも違つたもの」

私がくすくす笑いながら言つと、夫は苦笑する。

本当に大きさではなく、夫とお義父を比べると、親子だと言うのに性格も好みも似通つたところがあまりなかつた。彼は現実主義者

で、無駄な物を好まない。その癖、娘の気を引こうとプローチやお菓子や髪留めを分かりもしないのに毎日のように買つてきては「え」といたけれど。どこか不器用なのだ。それに比べてお義父さんはマイペースなのに、娘の気をしつかりと惹き付けていた。一人が似ているところをあえて言つと、二人とも人に對して優しいといふところくらいかもしない。それはとても大切なところなのだけれど。

「その点、どういうわけか血の繋がりもないお前の方が、親父と馴染んでたよ」

「あら、嫉妬ですか？」

「冗談めかして言うと、夫はふと優しく微笑んだ。そんな風に笑つた時の目は、少しお義父さんに似ているかもしない。

「いや、はたから見てておもしろかつた。なんだか二人とも子供みたいでなあ……確かにちょっと嫉妬も混ざつてたかも知れないけど。親父もお前といる時は生き生きしてたよ。お袋が死んでからはこの家にずっと一人だつただろう？　ちょっと寂しかつたのかも知れないな」

お義父さんは、お義母さんの死後、私たちが一緒に暮らそうと誘つても、この家を出ようとはしなかつた。うちも家を建てたばかりの出来事だったので、こちらに移り住むということはできなかつたから、その代わり夫が仕事の時は私と娘一人でよくこの家に遊びに來たものだつた。夫が休みの日は、毎回の様に家族でやつてきてはお義父さんと過ごした。娘もお義父さんに凄く懐いていたから、私がお父さんと子供のような遊びに夢中になるということは余りなくなつていたけれど、それでも時々天体観測や虫捕りを娘と一緒になつて三人で楽しんだ。そんな時それを見守つていた夫は、三人の父親のようだつた。

それを思い出して私が少し笑うと、夫は訝しげな顔をした。

「あなたは父親のようだつたわ」

寂しかつたのかなんで、私には分からなかつた。一緒にいる時のお義父さんはいつも楽しそうにしていたから。

夫は苦笑して肩を竦めると、夫曰くガラクタの山に手をつけ始めた。きっと殆どを捨てる事になるだろう。三週間後には、義弟の家族がこの家に移り住む。その時には、この部屋は甥っ子の部屋になっている。

人が死んでしまうのはなんて空虚なことだろう、と改めて思う。今は悲しくても、この悲しみは数ヶ月の内に薄れしていくことを私は知っている。何年も経てば、思い出しても哀しくなることはあっても、その人がいないうことが当たり前になつていて。再び同じ、胸を裂くような痛みが襲つてくることは、きっとない。乗り越えた気はなくとも、気付けば薄れている。上積みされていく記憶の山の中に埋もれてしまう。無理に掘り起こしても、それはもう泥だらけで古びている。仕方のないことだと分かっていても、その事実がおそろしい。まだそんなに時間が経っていない今でさえも、もう頭の中は冷静だ。子供の頃のように、一つの感情で胸をいっぱいにすることも本当に少なくなつた。

「あ、ちょうどよ」

夫が独り言のようにぽつりと言つて、窓の方を見ていたので、私もそちらに目を向けた。木枠の古びた窓は、硝子が少し分厚く、気泡が中に入つていたり緩やかなでこぼこがあつたから、そこから見る外の景色は透き通つた水の中を覗いているみたいだつた。その前を、ゆらりと蝶が泳ぐ。黒と、鮮やかな緑色をした蝶だ。

「そういえば、あれはどういったんだろう」

独り言の延長のように言つて、夫は方々で何かを探し始めた。積み重ねられた荷物が床に置かれて、みると散らかっていく。

「なにを探しているんですか」

「んん……図鑑だよ。さつき飛んでたちょうちよの名前、なんだつたつけなあ」

答えながらも夫は手を止めようともしない。仕方なく私も積み重ねた本の中からその図鑑を探すことにした。暫くして随分と散らかってしまった部屋のなか、小さな木箱に入った器具を見つけた。ピ

ンセットに半透明の油紙に溝の入った木の板。

なにかしらと思わず声を漏らして首を傾げると、意外にもその答えをくれたのは夫だった。どうやらそれは標本を作るセットらしい。私は標本箱を先ほどの男の子にあげたことを思い出した。あの子はそれを誰かにあげると言つていたけれど、貰つた子は標本をつくるのだろうか。

夫が出て行つてから散らかった部屋を片付けていると、親戚の女性が呼びにやつてきた。夫の従姉妹にあたる人だ。居間で今後のことを話し合つらし。彼女が行つてから私は部屋を出て行つた夫を探そうと縁側に顔を出した。すると、彼はそこに座り一人ぼんやりと庭の方を眺めていた様で、わたしを見ると少し驚いたような顔をした。

「あら、こんな所にいたの。色々話しあうみたいだから、あなたも来てちょうだい」

そう言つと、彼は膝に手をつき立ち上がつた。ふと、何かに気付いたようにまた庭の方を見る。その横顔が微笑んでいるように見えたのは氣のせいだろうか。

夫が部屋に入つてくる直前、縁側に小さな女の子がいた気がしたけれど、多分それも氣のせいだろう。私は静かに硝子戸を閉めた。

ひらひらと蝶が舞う庭で、少年は微笑む。

蝶が案内役だと母に聞いたのは、少年がほんの小さな頃のことだつた。母はそれを言った数日後に亡くなつた。蝶たちが戯れるように飛ぶこの庭で、倒れた母を見つけたのは少年自身だつた。あれからもうどれだけの年月が過ぎ去つただろうか。彼の母を知る者は、もう殆ど残つていなかつた。

先日も、この家で一人の老人が命を引き取つた。老人は病床でこの家に帰りたいと言つた。家族達はその願いを聞き入れ、最期の時を迎えるとしている老人を病院からこの家へと移した。老人は縁側の硝子戸を挟み、この庭を見ながら息を引き取つた。

時間は誰の前にも平等で、簡単に過ぎ去つていく。じきに彼のことを知る者もいなくなるだろう。少年の母親の様に。

少年はふと、縁側に座る少女に目をやつた。黒いワンピースに同色のタイツに靴、艶やかな黒髪に囲まれた顔はまだ幼く滑らかで白い。彼女は大きくて愛らしい目で少年の方を見た。その目が少年に問いかける。

お兄ちゃんだあれ、と。

少年は目を細めて懐かしげに微笑んだ。

「姿は変わつてしまつたけれど、君は僕のことを知つてゐるはずだよ」

少女は大きな目を更に大きくしてきよとんとした後、記憶を辿る様にぐるりと目を回した。少女の予想通りの反応に、少年はくすりと笑いを漏らす。少女のその仕草は、彼女が考え方をする時の癖だ。恐らく母親の癖がうつつてしまつたのだろう。

結局少女は少年の記憶を掘り当てることができなかつた様で、問い合わせる様に首を傾げて少年を見つめた。

「十秋だよ」

少女はますます首を傾げた。聞き覚えが無い訳でもない気はしたが、やはり思い出せない。

その様子に少年は寂しげに微笑んだ。それは、その少年の年頃には似つかわしくない笑みだつた。

「どうか、君は僕の名前を覚えていないんだね。まあ、それも仕方がないか」

少女は不思議そうに少年を見つめる。その様子を愛しむ様に少年は少女の頭を撫でた。少女は何かを思い出した様に目を大きくする。それとは反対に、少年はそんな少女の仕草を見て懐かしそうに目を細めた。

遠い昔のことだった。まだ言葉も覚えきれてない小さな彼女の手を引きながら、彼が雑草の生い茂る公園を歩いたのは。その時の彼女の手の暖かさを、頭を撫でた時の髪の柔らかさを少年は今でも覚えていた。遠いと言つても、彼の母との記憶ほどには遠くなく、けれど近くもない遠さ。

「小鞠こまり、父さんと母さんに挨拶はしたかい？」

少年が少女の名前を呼ぶのは久しぶりのことだった。

少女は素直に頷く。なにしろ彼女が両親に会うのも久しぶりのことだったので。彼女が挨拶をすると、彼女の父親は驚いた様に目を大きくした。母親は、彼女が挨拶したことにさえ気づかなかつた。それはほんの少し彼女に寂しい思いを抱かせたが、それを悲しむことはなかつた。母親は自分を愛してくれていると、彼女は痛いほどに知つていたから。

「そう。えらいね。うん？ 僕？ 僕はもういいよ」

少年はほんの少し寂しさを滲ませて微笑んだ。

後ろ手に隠していたのか、平べつたい木箱を少女の前に差し出した。硝子の嵌められた箱だ。少女はそれに見覚えがあつた。彼女の祖父がまだ健在だった頃、内緒だよと言つて見せてくれたものだ。そこには様々な色の蝶が蝶にされていたのだ。けれど、少年が少女

に差し出した箱の中身はからっぽだった。

伺う様に少女が見上げると、少年は笑みを深めて庭に目線を移した。少女もそれに釣られる様に庭を見た。柔らかな芝生に点々とある置き石、小さな池、小さな木々。そこにはたくさんの蝶がひらひらと舞っていた。

小さな指先を一匹の蝶に向けると、少女は呟く様に口を動かした。
黒と青の羽が美しい、彼女が知る唯一の蝶の名前だ。

「そうそう。あれは鳥揚羽蝶」

すっと少年は細い腕を上げて、少女と同じ方向を指差した。

「そして、あれが麝香揚羽に青条揚羽」

少年が名前を言った蝶以外にも、まだたくさん蝶たちが庭を色づかせていた。少年はそのどれもの名前を覚えているのだと、少女性を少女は知っていた。

「僕の母さんも蝶が好きなんだ。小さな頃、近所に生物学者が住んでいてね。その人に標本の作り方を教えてもらつて持つて帰つたら怒られたことがある」

少年の母はきっと生きている蝶が好きだったのだ。そして、生きているものの命を簡単にとつてしまつことを彼女は酷く嫌っていた。それがたとえ自身の血を吸う蚊であつてもだ。

「小鞠は、僕の母さんに会つたことがある？……そう。けど、今ならきっと会えるよ」

少女は田をぱぱくりさせると小首を傾げた。少女は表情こそ薄いものの、大きな目はその時その時の考え方や思いをありありと映し出す。

「それでも、君はずつと此処にいたのかい」

どこにいけばいいかわからなかつたから、と少女は言った。実際にその小さな口から声が発せられたわけではないが、少年には少女の言いたいことが自分の考えのようによく分かつた。

どこにいけばいいかわからなかつたから、ずっとパパとママといた。

少年は微笑むと、少女の頭を撫でた。少女は猫の様に心地よさそうに目を閉じる。

「じいさんのもうすぐ体が焼かれるんだ」

「ごみを捨てるんだ、と同じくらい少年は平坦な声で言った。

少女の大きな目が、無くなっちゃうの、と少年に問いかける。

「いつまでも残っているものなんてないんだよ。だけど、暫くは残るし、何か形を変えて残るかもしない」

そう言つた後で、少年は自分に言い聞かせるように色づく庭を見詰めながら、そうだつたらいいな、と呟いた。

此処は少年の生まれ育つた家だった。祖父と両親と過ごした日々は、今でも少年の心だけに色濃く残つている。小さな頃はこの庭で鶏と犬を飼っていた。大きいけれど気が弱く優しい犬は、自分よりも小さな鶏によく虐められていたのを少年が救つていた。彼の祖父はよく情けない犬だ、番犬にもなりやしないと言つていた。けれど、犬が老衰で死んでしまつたあと、ぼんやりと寂しそうに縁側から庭を眺めていたのを少年は知つていた。

少年は身体が強いとは言えず、病気がちだった。よく学校を休んでは廊下側の部屋で布団を敷いて寝込んでいた。こつそりと障子を開けて、硝子戸の向こう側を眺めるのが好きだつた。いつもと変わらない風景ではあつたが、それは彼が愛していただ場所だつた。雲が風に流されていくのを、蝶がふわふわと宙を漂うのをいつも見てきた。

けれどそれは少年だけが知る光景だ。少女にとつては此処は祖父の住む家で、とても面白い場所だつたのだろう。そして彼女の父もまた、少年とは違う目線でこの場所や人々を見てきたはずだつた。彼女の父も此処で生まれ育ち、そして今、手放そうとしている。

雪の様に積み重なつていく人の嘗みを止める術はない。昨日亡くなつた老人の遺体は焼かれ、無くなる。彼の人生の証拠とも言える物たちはその大体が他の人には手に余るもので、分配され、処分されていく。老人が使つていた部屋は彼の孫に引き継がれ、すっかり

その形を変えてしまうことだろう。

哀しむのはいいが、それは当たり前のことで受け入れるべき」とだ。

戸が開けられる音がして、一人が顔を上げて見ればスース姿の男性が縁側に出てくるところだった。

「箱の中身がないことを君の父さんが知つたら、不思議に思うだろうね」

男性は一人に気がついていないようで、暫く硝子戸の外を眺めていたが、横を向き歩き出すとほぼ同時に少女の姿に気づいた様だった。その時には少女はじっと標本箱に目線を凝らしていた。

「懐かしいなあ」

男性はそう言つと、少女のすぐ横に腰掛けた。少女を挟んで隣に座る少年には気づいていないようで、少女との会話の間、彼が少年を見るることはちらりともなかつた。

妻に呼ばれて男性がその場を去る際、彼は先ほどの一人と同じ様に庭の方を指差した。庭を見るその日は、少年に犬が死んでしまつたあの祖父の姿を連想させた。

なくなつていつてしまふもののことと思つと、酷く哀しい。この庭の風景もいつかはなくなつてしまふのだろう。

少年がそんなことを考えていると、ぱんつと小気味よい音がした。どうやら少女が手を叩いたらしい。少年が見ると、少女は小さな手の平を広げて呆然とその上にあるものを見つめていた。

「うわあ、殺しちゃったのかあ」

少年が苦笑交じりに言つと、少女はびくりと肩を震わせ見開いた目を少年に向けた。何か大きな罪でも犯したような怯えようだ。少年は小さく唇を歪ませる。それは、人にとっての罪ではない。

少年は少女に三角紙を手渡した。少し前に彼女の祖父の部屋から持つてきていたものだ。古びたそれは、祖父にとっての少年時代からの宝物だった。生物学者に貰つた物で、彼はそれを使って標本を作ってきた。

懐かしい母の声が呼んでいる。

少年は少女の手を取った。鱗粉が付いた小さな手は、柔らかくすべすべとしている。生物の名残ももうそこにはない。けれど、少女だけはその感触を知っている。

それでいい。実のところ、少女の手の平で死んだ蝶も、老人もそう変わりない。

少年が手を引くと、少女はそれに従つた。

長い廊下を進んでいく。そこから見える景色は新しくもあり古くもあった。丈比べをした木の柱には此処に住んでいた少年や少女の父の線が残っている。修繕を繰り返しながら古くから使われてきた硝子戸は、ゆらゆらと外の景色を揺らす。廊下の隅に置かれた藤の安楽椅子には少しだけ埃が被つている。

「随分と長い間待たせてしまったみたいで、『ごめんね。これからは僕が一緒にいるよ』

少年が前を向いたまま囁くような声で言つと、少女は小首を傾げた。

その目はずっと？ と問いかけている。

ずっと、なんてことは無いのだと先ほど少年は言つたばかりだ。けれど、そう思つのもいい。これからは、ずっと此処で少女と遊び続ける。

少年は返事の変わりにぎゅっと少女の手を握ると、軽やかな足取りで廊下を駆けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5472n/>

標本箱

2011年2月15日03時55分発行